

施設の紹介

◇ 神戸掖済会病院を紹介します

船舶衛生管理者講習で毎年お世話になっている「神戸掖済会病院」を改めて紹介させていただきます。

正式の名称は、社団法人日本海員掖済会神戸病院。東京に本部を置く、日本海員掖済会



傘下の全国8箇所の病院群のひとつとして神戸の地で運営されています。

掖済会の成り立ちは明治13年まで遡るも、大正3年11月の神戸海員病院開設に始を發し、昭和6年3月に神戸東川崎町から「中山手」への新築移転を機に現在の名称となっています。

この後、「中山手の掖済会さん」として永年皆さんに親しまれていましたが、平成13年3月に現在の神戸市学が丘に新築移転され、「掖済」の基本理念の下、6病棟・317床等を擁する神戸の中核的病院として医療を通じた貢献が成されているところです。ところで、「掖済会」、「掖」、とは何か気になるところです。同会の「創立120周年記念誌」（平成12年6月）によると、「掖」は、たすける、よい方へ導くの意で、「済」は、たすける、敬うの意であると記されています。また、同会HPには「掖済」は、腋（わき）に手を添えて助けるの意味。

「我が国郵便制度の創始者として名高い前島密氏が、本会設立時に名称とした言葉」との記述もなされています。

掖済会は、「海員」に対する福利厚生を目的として設立された我が国で最も古い公益法人です。現在の定款目的の冒頭に「本会は、船員及びその家族並びに遺族に対する…」と「船員」の文字が明記されていることからこのことが伺えます。

（余談ではありますが、現行船員法では、第2条に「海員」、第1条に「船員」の定義規定が置かれています。）

〔社団法人日本海員掖済会〕 <http://www.ekisaikai.com/>

〔神戸掖済会病院〕 <http://www.kobe-ekisaikai.or.jp/>

◇ 神戸海岸病院を紹介します

衛生講習等で、よきパートナーとしてご協力いただいている財団法人神戸マリナーズ厚生会「神戸海岸病院」（佐藤芳子院長）を紹介させていただきます。

「神戸海岸病院」は、当時の日本郵船(株)社長 近藤廉平氏が私財により設立した財団

法人が1925年に開設した「郵船布引病院」を前身としています。

山陽新幹線・新神戸駅開業にともなう神戸市区画整理事業により、1972年に現在の神戸市中央区磯辺通り1-1-28へ新築移転。名称も「神戸海岸病院」に改めました。

1985年には、迎えた高齢化社会における健康管理と疾病予防の重要性から「健康管理センター」を新設。1993年には増加するニーズに対応して消化器内視鏡室を独立設置させました。



以来、専門医が常勤する外来各科の拡充を推し進めると同時に、一般病床に施設や広さなどを拡充した療養病床も兼ね備えた「ケアミックス」スタイルのサービスも提供するなど、地元神戸の地域医療の一翼を担っています。2004年には財団法人名称を近藤記念厚生会から「神戸マリナーズ厚生会」へと改称。地域医療へのさらなる貢献をめざした活動を進めています。(ISO9001:2000, JISQ9001:2000取得認定、病院機能評価Ver.5 認定病院)

神戸支部活動では、各種衛生講習のほか、2名の訪船衛生技術指導員、船員労働安全衛生月間での船員無料健康相談などでご協力をいただいています。



[http:// www.kobe-mariners.jp/](http://www.kobe-mariners.jp/)

◇「神戸市立海外移住と文化の交流センター（旧神戸移住センター）」を紹介します

「1930年3月8日。神戸港は雨である。細々とけぶる春雨である。海は灰色に霞み、街も朝から夕暮れどきのように暗い。三ノ宮駅から山ノ手に向かう赤土の坂道はどろどろのぬかるみである。この道を朝早くから幾台となく自動車が駆け上って行く。それは殆んど絶え間もなく後から後からと続く行列である。この道が丘につき当って行き詰ったところに黄色い無装飾の大きなビルディングが建っている。(石川達三「蒼氓」より)」



黄色いビルディン、「国立海外移民収容所」は神戸に1928年に設立された。1908年 第1回ブラジル行移民781名を乗せた「笠戸丸」が神戸港を出港した20年後のこと。

その後、時代の流れの中で神戸移住教養所（1932年）－神戸移住斡旋所（1952年）－神戸移住センター（1964年）に改称。1971年 神戸港からの最後の移民船「ぶらじる丸」が出航し、神戸移住センターは閉鎖し、神戸市に移管されました。阪神大震災後は神戸海洋気象台の仮庁舎だった事もあったとのこと。

2009年 旧神戸移住センターの再整備が完了し、外壁や窓枠の色、居住者の居室など建設当初を再現した「神戸市立海外移住と文化の交流センター」が6月開館しました。

5階建ての館内は、「希望と未知への船出の広場（移住ミュージアム）」、「多文化との共生の広場（在住外国人支援）」、「芸術を生かした創生の広場（国際芸術交流）」の3つの空間で構成されています。当時の神戸の街並みや海外移住の歴史、移住先への道のりや

暮らしを当時の映像、写真で紹介しています。当時使われていた農具なども展示しています。

蒼氓には、神戸港「第三突堤」から移民を乗せた大阪商船（ら・ぷらた丸）の出航風景も記されています。11月連休後半のある日、第三突堤～海岸通り～鯉川筋を北へ歩いて約1時間。JR元町駅東口から坂を上り詰めた諏訪山・山裾にある「海外移住と文化の交流センター」を訪れました。センター1階の床に描かれた「神戸移住マップ」を見て、一週間の研修後の朝、幾多の移民の人々はこの逆コースを歩いて第三突堤へ向かったのか、元町界隈に集う人々を横目にして何を思い旅だったのか。センターの音声コーナーで聞いた「日本最期のイメージは神戸」、「日本最期の住み家はセンター。ふるさとになる」、「船が岸壁を離れ、日本最期のイメージとして残るのは六甲山」との声を思い出して感慨に浸る一時でした。

◇蒼氓（そうぼう）とは、「もろもろの民、すべての人民」という意味。（岩波国語事典・第7版）石川達三は、1930年に移民団に投げブラジルへ渡った経験をもとにして神戸の移民収容所風景を描いた「蒼氓」（1935）を執筆し、第1回芥川賞（1935）を受けた。第二部「南海航路」、第三部「声無き民」をあわせて『蒼氓』として1939年8月、新潮社より刊行。

（アクセス）

JR元町駅東口から鯉川筋を北へ 徒歩 約15分。

◇2001年メリケンパークに「神戸港移民船乗船記念碑」も建立されている。

◇「K O B E 鉄人 P R O J E C T」を紹介します

09年10月、JR新長田駅近くの若松公園に「鉄人28号」のモニュメントが完成しました。

高さ約15m・総重量50t、鉄人生みの親、漫画家横山光輝は神戸生まれの神戸育ち。多くの人々が訪れています。近くの大正筋商店街に「鉄人三国志ギャラリー」も12月にオープンしています。

鉄人の勇姿はJR神戸線の車窓からも見えますが、間近で見ると重量感も伝わります。カメラ撮影

では太陽の位置に注意が必要、周りの住宅で光が顔に当たる時間が限られているような気がします。露出調整などが必要かも。公園付近には長田名物そばめし、ぼっかけメニューが並ぶ鉄板・こなもんの「お好み焼屋さん」も沢山あります。「ねぎすじ焼」、「すじ飯」の”すじ系統”がおすすめです。

* 「<http://www.kobe-tetsujin.com/>」、「神戸鉄人28号」などの検索でも楽しめます。

